

令和 3 年 6 月 23 日現在

機関番号：32618

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2020

課題番号：18K00193

研究課題名（和文）藤島武二の活動からみる官展の画家の社会的な役割と美術制度の研究

研究課題名（英文）Research on Fujishima Takeji and Activities of the Painters under the Art System of the Kanten Exhibitions

研究代表者

児島 薫 (Kojima, Koaru)

実践女子大学・文学部・教授

研究者番号：40195714

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 900,000円

研究成果の概要（和文）：画家藤島武二に関し、スケッチブック、画稿帖、縮図帖などを調査し、制作のプロセスや思想について考察した。藤島が留学以前に、どのような西洋美術や西洋のデザインのイメージを学んだのかについて、参照元を一部解明した。また留学後の藤島が「東洋」への憧れを持っていたことについても彼が描いた女性像を通じて考察し、藤島の考える「東洋」は中央アジアを含む広い地域であったことを明らかにした。これらについて論文やシンポジウムで発表し、それらを著書『女性像が映す日本 合わせ鏡の中の自画像』にまとめて出版した。

他に、岡田三郎助に学んだ女性画家についても、有馬さとえ、いわさきちひろ等に関する研究論文を発表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

藤島武二は文展、帝展といった政府が主導した展覧会の重鎮であり東京美術学校教授として後進に与えた影響は大きい。また戦前に日本が統治政策の一環としておこなった「朝鮮美術展覧会」と「台湾美術展覧会」にも審査員として出張した。そのため藤島は1人の画家という枠を超えて、明治末から昭和戦前期における日本の美術政策、美術行政と深く関わる存在である。藤島が構想し絵画化した「東洋」について考察し、主に台湾で発表したことにより、台湾の近代美術史にも寄与することができた。

またフィンランドと日本の女性画家を比較しジェンダー構造の違いを指摘したことは、ジェンダーギャップが問題となる今日時宜を得た内容となった。

研究成果の概要（英文）：I explore the work of Fujishima Takeji through his numerous sketchbooks and researched the process of his making works. I proved some of his sources of reference in Western art and graphic images. After he had studied in Europe, he cherished the idea of "Toyo". I analyzed his idea of "Toyo" in his images of women, and proved it contained the vast area as far as Central Asia. I wrote articles and gave a paper at a conference in Taipei on these topics and published them in my book titled "Images of women reflect modern Japan: Self-portrait between dual mirrors". I also wrote articles on female artists, Iwasaki Chihiro and Arima Satoe, who studied under Okada Saburosuke.

研究分野：美術史

キーワード：藤島武二 文展 帝展 官展 東洋 女性画家 台湾 岡田三郎助

1. 研究開始当初の背景

藤島武二(1867-1943)は日本の洋画家として著名であり、これまでに多くの展覧会がおこなわれ、画集が出版されてきた。しかし、伝記的な事実については、隈元謙次郎『藤島武二』(1967年、日本経済新聞社)が最も詳しく、その後の画集類はこれらを元にしており、新事実の発見があまり見られていなかった。また画家自身がまとめた文章を残していないため、晩年に雑誌などのインタビューに答えた内容を記者らがまとめた記事が画家の制作の事情や理念を知る手がかりであった。また隈元謙次郎は事実の根拠となる資料を必ずしも明確には示していなかった。そこで、何か確実に画家の考えを知る一次資料が無いかを探すなかで、それらを調査する機会に恵まれ、以下の研究をおこなった。

(1)藤島武二自筆書簡の調査。

東京国立博物館、東京文化財研究所所蔵の藤島武二が黒田清輝、久米桂一郎に宛てた書簡類、計52通の整理、翻刻、解説を東京文化財研究所『美術研究』415号-417号(2015-16年)に発表した。また藤島武二が弟子の児島虎次郎に宛てた書簡の翻刻、解説を『実践女子大学美術史学』31号(2017年)、『実践女子大学文学部紀要』59集(2017年)に発表した。黒田、久米宛書簡は藤島が若い時期に書いたものであったが、児島宛書簡は晩年期のものであり、これまであまり知られて来なかった画家の人間像、仕事ぶりを明らかにした。

(2)藤島武二のご親族が所蔵するスケッチブック、ノート類の調査。

(1)にあげた調査の結果、ご親族からご所蔵の資料の調査を許され、2年近くにわたり調査をおこなった。これらはノート、スケッチブック、クロッキー帳類だけで約100点あり、他に書類なども加えると膨大な量である。本研究を始める以前には、リスト作成まで終了していた。

(3)女性画家への教育に関する調査。

藤島武二が短期間ながら指導した小堀杏奴の作品調査をおこなっていた。また藤島と長年にわたり同僚であった岡田三郎助は、特に女性画家への教育者として知られることから、岡田の旧居に隣接して建てられたアトリエの女子洋画研究所跡を見学した。これを機に内弟子であった女性画家有馬さとえのご親族と面識を得て、調査の手がかりを得た。

これらが本研究をめざした背景であり、藤島に関してまだ新たな研究の余地が大きいことを知り得たことが、本研究をおこなう動機となった。

2. 研究の目的

本研究課題の申請時における当初の研究目的は、主に以下のとおり。

(1)既に入手した資料類を精査することで、これまで明らかでなかった藤島の行動、制作のプロセス、発想の源泉を考察する。

(2)資料類を元に、朝鮮、台湾、日本各地への旅が藤島の画業においてどのように結実したのか、また彼がこれらの地の画家たちとどのような交流があったのかについてさらに調査する。

(3)藤島と長年の同僚であった岡田三郎助について、画家としての活動だけでなく、女性画家に対する教育者としての姿勢について明らかにする。帝展で活躍した有馬さとえをはじめとする女性洋画家については、まとまった文献がまだほとんど無いため、可能な範囲でご遺族への聞き取り調査をおこなう。

(4)藤島、岡田の周辺の画家たちの活動についても調査をおこない、藤島をはじめとする、岡田らの活動から、官展が当時の社会のなかでどのような役割を担ったのかを検討する。

3. 研究の方法

(1)藤島のスケッチブック等の内容を読み込む。中に描かれた海外作品の模写と考えられる内容について、その原図を調べる。文字の書き込みから藤島が参照した美術や学習方法、本画制作に関する手がかりなどを考察する。

(2)東京都公文書館所蔵の明治時代の文書などから、藤島の経歴として知られてきた事柄についての確認をおこなう。

(3)藤島に関連する人物の文献を調査する。

(4)女性画家について、遺族からの聞き取り、家族に残された資料の調査、作品研究をおこなう。

4. 研究成果

(1)「日本のアール・ヌーボー」の源泉の一つとなる資料の提示

藤島の遺品のなかに《画稿帖》として知られたものがある。これについてはごく一部が紹介されたことがあるのみであった。内容は海外のポスターや本、雑誌などを参照して縮図にして描いたものである。この中に含まれた図の原画を探することで、藤島が雑誌『明星』にアール・ヌーボー風の表紙絵やカットを寄稿した時期のものと判明した。さらに、雑誌『The Studio』の中に収録された写真から写したものが多数含まれていたことが今回の調査により明らかになった。こ

れまでは、藤島が参照したのは、1900年パリ万国博覧会の視察に渡欧した東京美術学校の同僚たちが持ち帰ったフランスのグラフィック資料が中心であると考えられていた。しかし、それに加えて、『The Studio』が紹介した絵画、版画、手芸品、工業品など様々なジャンルのコンペの入賞作品の写真を細々と写していたことが明らかとなった。その中には日本の創作版画に大きな刺激を与えたと先行研究で指摘されてきたウィリアム・ニコルソンの木版画も含まれていた¹。また、『画稿帖』に含まれるイギリス、オーストリア、ベルギーなどの印刷物の模写は、これまで指摘されていたエミール・オルリクとの交流を裏付ける²。これらの内容を、『明星』時代の藤島武二-ミュシャとの関わりと《画稿帖》について-』『実践女子大学美術史学』34号(2020年3月、p.81-97)にまとめた。

《画稿帖》の内容は藤島が与謝野晶子歌集『みだれ髪』などの書籍の装幀や雑誌『明星』の表紙、コマ絵を制作する上での創作の源泉であったことが明らかになり、藤島がこうした書籍、雑誌の仕事で切り開いた「日本のアール・ヌーボー」の背景となる海外のグラフィック資料の日本への流入状況を知ることができた。《画稿帖》の内容を公開し、私見による解説を付したことは、広く近代美術史、日本近代文学史の研究者に有益である。

(2) 藤島武二が考えた「東洋」観に関する台湾での研究発表

藤島が1920年頃から「東洋趣味」への傾倒を自ら表明していたことについては、「藤島武二による中国服の女性像について 《絞剪眉》を中心に」『実践女子大学美術史学』29号(2015年、p.1-20)にまとめていたが、その後の知見を加えて書き直した内容が翻訳され、「藤島武二的中国服飾女性像」『藝術学研究』(国立中央大学藝術学研究所、2019年、p.236-263)として台湾で出版された。

また、「藤島武二が構想した 東アジア 的な表象について」を台湾の財団法人福祿文化基金会と中央研究院が主催するシンポジウム「近現代東亞美術史の新資料與新研究」(2019年12月6日、於：北投文物館、台北市)にて発表した。このシンポジウムは新資料の紹介がテーマであったため、藤島のスケッチブックのメモ書きから藤島が参照した書籍、画集の情報を提示し、そこから藤島が敦煌の壁画にも関心を広げていたことを指摘し、藤島の作品にその学習成果を示すものがあることを述べた。このシンポジウムは2020年に台北で開かれる展覧会の準備のためのものであり展覧会を見に訪台する予定であったが、Covid-19のために不可能となった。

(3) 東京都公文書館所蔵のシカゴ・コロンプス博覧会に関する公文書を精査した。

1893年にアメリカで開催されたシカゴ・コロンプス博覧会に際して、明治美術学会は参加をボイコットしたが、藤島は後年の回想の中で、最後まで出品したいと主張したと述べている。公文書の調査の結果、実際にそのような経緯があったことを書類で確認することができた。この点を含め藤島の経歴などについて新たに判明した事実については、拙著『女性像が映す日本-合わせ鏡の中の自画像』(2019年、ブリュッケ)の中の藤島の評伝の部分において述べた。史料調査では藤島に限らず他の参加者や日本からの出品事情についての多くの手がかりを得たため、今後さらに研究を広げ、論文にまとめる予定である。

(4) 女性画家について

1. 有馬さとえに関する調査と成果発表

本学に所蔵する有馬さとえによる油彩画作品2点を2019年に修復し、2020年1月6日から31日まで本学香雪記念資料館下田歌子記念室のなかで「女性への教育と美術」と題した展示をおこなった。あわせて「有馬さとえ作《五月の窓》と《チャイナドレスの女性》について」(『香雪記念資料館館報』17号、2020年3月、p.59-64)を執筆した。有馬さとえは官展の重鎮、東京美術学校教授であった岡田三郎助のもとで学んだ洋画家であり、帝展では女性で初めて特選を受賞した。戦後も長く制作を続け、没後は展覧会が開かれ、主要作品が主だった美術館に寄贈されたが、これまで顧みられずにいた。本学で展示をおこない、所蔵館の学芸員と情報共有をしたことにより、東京国立近代美術館、京都国立近代美術館、神奈川県立近代美術館でも所蔵の有馬作品を展示し、鹿児島市立美術館ではニュースレターに掲載するなど、有馬の再評価につなげることができた。文献調査に加え、ご親族に聞き取り調査をおこない、論文に反映した。

2. いわさきちひろに関する調査と成果発表

2018年に東京ステーションギャラリーを皮切りとする「生誕100年 いわさきちひろ、絵描きです。」展が開かれ、その図録に小文を寄稿した。これは、岡田三郎助アトリエに開かれていた女子洋画研究所に関する調査を始めていたことから依頼されたものである。いわさきちひろは岡田の最晩年に女子洋画研究所に通い、デッサンの勉強をおこなった。いわさきについては個人的な情報が多く残されているため、それを精査することで岡田三郎助の美術教育について考察することができた。成果は「岩崎知弘が「いわさきちひろ」になるまで」(「生誕100年 いわ

¹ ウィリアム・ニコルソンと日本の創作版画については、河野実「版の絵から絵画への萌芽 刀画《漁夫》をめぐる」『青木茂監修、町田市立国際版画美術館編輯『近代日本版画の諸相』中央公論美術出版、1998年、p.269-290。

² エミール・オルリクと藤島武二との交流については、西山純子「日本が見たエミール・オルリク」『ミュシャと日本、日本とオルリク』国書刊行会、2019年、p.289-295。

さきちひろ、絵描きです。」展図録、20018年、p.39-42)に発表した。執筆準備の段階で、いわさきちひろが戦前個人的に師事した中谷泰について、三重県立美術館が保管していた資料を調査した。その中にいわさきちひろを描いたデッサンを見つけることができた。このことから、その後そのデッサンはいわさきちひろ美術館に寄贈された。

3. 日本の近代の女性画家たちの活動を概説

2019年に国立西洋美術館で「モダン・ウーマン フィンランド美術を彩った女性芸術家たち」展が開かれた際のシンポジウムで、フィンランドの女性画家たちについてのフィンランド美術関係者による発表があり、これに対して日本の1870年代から1950年代までの女性画家をめぐる問題を「近代日本の女性画家たち—教育、展覧会、市場」と題して発表し、『国立西洋美術館紀要』24号(2020年3月p.45-56)で報告した。フィンランドの研究者、美術館関係者に日本の事情を説明し、それぞれの近代美術史におけるジェンダー構造の違いについて意見交換することができた。

(5)台中、国立美術館開催のシンポジウムにオンライン参加

2019年に台北でシンポジウムに参加したことがきっかけとなり、2021年3月13日、14日に台中市、国立台湾美術館で開催された国際シンポジウム「共構記憶 - 臺府展學術研討會」に参加を要請された。結果的に日本、韓国からはオンライン参加となったが、「關於臺展、府展時代的 日本官展中日本畫的新趨勢—從「故郷」觀點進行考察」(台展、府展時代の日本の官展における日本画の新傾向について—「故郷」の視点からの考察)を発表した。これは、2021年度からの申請が認められた科学研究費研究課題「日本と台湾における都市からみる「故郷」の表象とその比較—1930年代を中心に」(研究課題番号:21K00170)にこれまでの研究成果を引き継ぐ内容とした。

まとめ

これまで行ってきた黒田清輝、女性画家に関する研究、そして藤島武二に関する総論をまとめて、『女性像が映す日本—合わせ鏡の中の自画像』(2019年、ブリュッケ)を出版したことが最も大きな成果であるが、それに伴い、上述したように、予想していなかった原稿依頼、発表依頼を受け、研究の広がりが生まれ、2021年度以降の研究につなげることができた。なお、本研究の成果に基づき、藤島武二の年譜を見直して作成し、今年度内に学科紀要『実践女子大学美術史學』に発表する予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計10件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 児島薫	4. 巻 34
2. 論文標題 『明星』時代の藤島武二—ミュシャとの関わりと《画稿帖》について—	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 実践女子大学美術学術史学	6. 最初と最後の頁 81, 97
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34388/1157.00002110	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 児島薫	4. 巻 25
2. 論文標題 藤島武二の中國服飾女性像	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 國立中央大學藝術學研究所発行『Journal of Art Study（藝術学研究）』	6. 最初と最後の頁 236.263
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 児島薫	4. 巻 24
2. 論文標題 近代日本の女性画家たち-教育、展覧会、市場	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 国立西洋美術館研究紀要	6. 最初と最後の頁 45,57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 児島薫	4. 巻 17号
2. 論文標題 有馬ささえ作《五月の窓》と《チャイナドレスの女性》	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 香雪記念資料館館報	6. 最初と最後の頁 59. 64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34388/1157.00002145	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 児島薫	4. 巻 62集
2. 論文標題 上村松園《焔》の制作意図とその背景について	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 実践女子大学文学部紀要	6. 最初と最後の頁 1, 15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.34388/1157.00002135	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 児島薫	4. 巻 -
2. 論文標題 岩崎知弘が「いわさきちひろ」になるまで	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 「生誕100年 いわさきちひろ、絵描きです。」展図録、東京ステーションギャラリー、他	6. 最初と最後の頁 39-42
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 児島薫	4. 巻 -
2. 論文標題 女性像が示す近代、大衆、ニッポン	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 「モダン美人誕生 岡田三郎助と近代のよそおい」展図録、ポーラ美術館	6. 最初と最後の頁 6-11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 児島薫	4. 巻 -
2. 論文標題 女性画家としての栗原玉葉 「女性性」をアイデンティティとして	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 「栗原玉葉 長崎がうんだ、夭折の女性画家」五味俊晶編、長崎文献社	6. 最初と最後の頁 228-239
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 児島薫	4. 巻 27
2. 論文標題 大衆が導くナショナリズム - 奉祝の時代	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 近代画説	6. 最初と最後の頁 4-7
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 児島薫	4. 巻 27
2. 論文標題 朝鮮物産共進会「美術館」天井画下絵について	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 近代画説	6. 最初と最後の頁 132-135
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件 (うち招待講演 3件 / うち国際学会 3件)

1. 発表者名 児島薫
2. 発表標題 近代日本の女性画家たち-教育、展覧会、市場
3. 学会等名 国際シンポジウム「近代の女性芸術家たち:フィンランドと日本」(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 児島薫
2. 発表標題 藤島武二が構想した「東アジア」的な表象について
3. 学会等名 台湾中央研究院「近現代東アジア美術史の新資料と新研究」(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 児島薫
2. 発表標題 文展における美人画の隆盛と女性画家について - 松園を中心に -
3. 学会等名 明治美術学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 児島薫
2. 発表標題 台展、府展時代の日本の官展における日本画の新傾向について：「故郷」の視点からの考察
3. 学会等名 国立台湾美術館 国際シンポジウム「共構記憶 - 臺府展學術研討會」（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 児島薫	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ブリュッケ	5. 総ページ数 391
3. 書名 女性像が映す日本 合わせ鏡の中の自画像	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関